

## 俳句になった東工大(Part 2)

「俳句になった東工大」と題して、日本女子大 OG の方々の句を紹介したところ（東工大クロニクル No. 489, 2013）、この記事が「蔵前俳句会」の方々の目に留まり、資料館宛に面談（2014.9.10）の申し込みがあった。句会の世話人・会長である高瀬昭三（1951 化工, 85 歳）と杉本光男（1945 電化, 93 歳）の御二方にお話しを伺い、本学にも俳句の伝統があり、2016 年には蔵前俳句会は 100 周年を迎えることを知った。しかも、大正 4 年（1915）からの句がすべてデジタル化されて保存されているというので、寄贈をお願いしたところ快諾していただいた。それぞれの時代における蔵前人の視点と心の内を読み解く貴重な資料になるに違いない。最近の作品は同窓会誌「蔵前ジャーナル」の「蔵前俳壇」に毎号掲載されている。

情報収集を兼ねて、月例句会（2014.11.12, 水）のあとに、会員の方々との懇談の機会を設けていただいた。その折に、本学の教員で研究室で月例句会を開いていた人たち（斎藤幸男 1934 東北大物理, 酒井善雄 1943 電気）や本学出身者で著名な俳人（井本商三, 1944 電化、『奥の細道をたどる』〔角川書店, 1973〕で有名な井本農一の弟；中島隆, 1951 建築, 俳諧の巨匠“富安風声”に師事, 1999 年に句集『霸王樹』上梓；岸田芳夫, 1959 電気, 1998 年から俳句結社“藤”代表, 句集『青すすき』〔文芸社, 2012〕）がおられる事を教えてもらった。

何よりも印象深かったのは、太平洋戦争末期の 1943（昭和 18）から 1945（昭和 20）年まで休会しただけで、1946 年（昭和 21）にはいち早く句会を再開したことだ。俳句の心（俳人の心意気）が戦後の復興を強く後押ししたのは間違いない。ここでは、蔵前俳句会 会員の心の目を通して見た本学の姿（俳句）を紹介したい。

# 母校130年記念大岡山・隅田蔵前めぐり吟句写真集

蔵前旅行会

2011・5・17

## 大岡山夏燕



本館も見えず葉桜茂りたる  
若き日の巣に戻り来て夏燕  
大岡山母校なつかし夏木立  
夏燕想いの行き来若き日々

松村秀雄  
佐鳥風朗  
尾島正男  
佐鳥風朗



葉桜のキャンパス歩き懐かしく  
昨年（こぞ）の日を思いて舞うや夏燕  
古き巣に舞い集いぬる夏燕  
教壇の師の声恋し窓燕  
百年の歴史を刻む記念館

岩田喜惇  
佐鳥風朗  
佐鳥風朗  
高瀬千紫  
依田連平

## 蔵前創立史蹟



立夏過ぎ史蹟に見入り想い馳せ

岩田喜惇

榊社に蔵前の創立花菖蒲

尾島正男

隅田川蔵前偲ぶ夏近し

尾島正男

八幡の真白き宮司夏木立（富岡八幡宮）

尾島正男



## 懇親会

懇親会スカイツリーや夏の窓

依田連平

夕立やスカイツリーに乾杯し

尾島正男



# 洗足池・東工大周辺吟行記

H16・6・19

洗足池公園と母校東工大周辺を探索すべく東急池上線洗足池駅に集合。当日は梅雨晴れ間の大快晴の吟行日和。ボートが浮かぶ洗足池は明るく私達同行8名を迎えてくれました。池の周辺の風景は広重の「名所江戸百景」にも描かれた江戸の景勝地であります。



風薫る洗足池や木々高し 土筆子

洗足の池よく晴れて蝌蚪育つ 土牛

葉柳のゆれる池面に鯉群れて みどり

洗足池は 昔は千束池と呼ばれ洗足池と呼ばれるようになったのは日蓮が身延山から常陸への途中この池で休息、かたわらの松に袈裟をかけ、池の水で手を洗ったことによると言う。袈裟懸松、妙福寺を巡り勝海舟夫妻墓所、西郷隆盛の留魂詩碑へ到る。

紫陽花の導く道や海舟碑 罌鳥

風雲児墓石に眠り風薫る 土牛

池のほとりは水生の植物と動物が豊かに棲息。

洗足の萼紫陽花や背の高く

芳枝

睡蓮のひとつふたつの照り返し

陽二

池渡る風に蒲穂の高さかな

土筆子

三連の太鼓橋を渡り左に弁天島、右に子供広場。 亀には一同ご執心。



軽鴨や子鴨ひきいて池遊び

芳枝

亀の子の顔のくまどり色妖し

土筆子

首あげて手をかく亀の皐月池

罌鳥

やがて千束八幡神社、境内に名馬池月が雄姿を見せる。「そのいなく声は天地を震わすほどで馬体はたくましくその青毛は池に映る月光の輝くように美しかった」という。源頼朝の乗馬として献上され、宇治川の先陣争いで佐々木高綱が騎乗。この銅像はその末裔の作という。



池月の馬緑陰の威容かな 士牛

頼朝の馬嘶くや夏の池 千紫

笛渡る洗足池の梅雨晴れ間 陽二

洗足池を後にして母校大岡山へ向かう。その昔の銀杏並木は学舎を越すほどに繁る中を 想いをそれぞれ語りつつ、句会場角笛へ。



若き日の悔いありやなし夏燕 千紫

学壁は問いに答えず夏構え 千紫

梅雨休み時計の塔は輝きて 草芥

記念樹も老樹となりぬ夏木立 草芥

吟行収穫を積み上げ互選 1 時間余、好吟巧句大変盛会でありました。



思い出が桜並木を駆け抜ける  
 速彩より桜の似合う学舎かな  
 学生寮なき丘今は花の宿  
 老幹に力貰えし花見かな  
 ジーパンのペアルックや花衣  
 楓若葉ワグネル教授像飾る  
 老桜樹棟の集積回路かな  
 階登る老学暫し春愁い  
 一陣の風やわらぎて花万朶  
 花の下木道を行く車椅子  
 大木の根にも可愛いく桜咲く  
 雙鏢と笑顔集いて花万朶咲く  
 想い出の富士見える橋桜咲く



ワグネル教授碑



手島教授像



藤田佳津子  
 千田草芥  
 二宮遊仁  
 杉本茅草  
 高木杜史  
 白石台水  
 池田土筆子  
 高瀬千紫  
 柄脇雅風  
 藤田美寛  
 塚越芳枝  
 田胡みどり  
 三井澄水



本館内庭



富士見橋

銀杏拾う

中島 隆舎

母と子が銀杏拾うワグネル碑

マフラーの娘や社会工学科

冬浅しコンクリートの試験体

万両あたりやむかし学生寮

蔦もみじ地球惑星講義室

銀杏散る今ものこれる自動車部

寒禽やタイムトンネル抜けおれば

冬暮るる液化窒素の白タンク



# 大岡山暮秋

高瀬千紫

秋天下学塔学樹に抱かれて  
木の实降るセピアの色の研究棟  
階段の教室窓の秋日射し  
図書館の書架足早に秋深み  
歓声のテニスコートは紅葉下  
キャンパスの黄落の道日漏れ道  
鳥渡る向学の寮夢の跡  
校壁に秋思の尽きず去り難く



## 母校桜吟

学び舎の記憶をたどる花の下

士牛

五十年櫻も老いぬ吾もまた

洪

大木の櫻の奥に母校かな

千草

花の雲へだてて光る時計台

杜史

研究棟渡り廊下の花の冷え

千紫

立て看もあるキャンパスの櫻かな

紫華



古巢なる学舎  
仰げば  
初燕  
鹿郎

原 伸宣 遺句集 (1977.03)